

22750
149号

同人雑誌誌

同人雑誌誌 発行ごとに二部、左記の宛先までお送りください。
〒108-8345 東京都港区三田2-1-45 慶應義塾大学内
三田図書集積部 同人雑誌誌部 係

佐々木義登

若松由希久「灰田さんの思い出」(「せる」第118号)の主人公は夫の暴力から逃れて実家に帰っています。偶然中学時代に友人と制作した手作りのラジオドラマのカセットテープを発見します。一方、職を得た主人公ですが理不尽な対応に苦しみます。そうするうちに中学時代にラジオドラマを作った灰田さんとのその後の記憶がよみがえってきます。それは構造的な父親のせいであつた孤立的な過去であつた。小説後半、自分を追ってきた夫から逃れ、かつての灰田さんの家にとり着いた主人公が、灰田さんの父親を刺殺する、現実とも妄想ともつかないラストは賛否両論あるかと思いますが、小説一編のカタストロフとして必然性を感じました。幼少期も、長じても男性の暴力に翻弄される女性、そして被害者一辺倒と思われた主人公もまた同級生に対して罪を背負った存在であつたという展開に人間というもの底知れない闇を感じました。

木戸岳彦「隣人たちの道」(「季刊作家」第98号)の主人公昭夫は加茂野という地方の町で理髪店を営んでいます。いつのまにかアマゾンからの移住者がそこに住み着いてお

り、町の人々から「隣人」と呼ばれています。昭夫の店にも「隣人」を束ねるリカルドという青年がやってきて交流するようになります。しかし「隣人」たちはただの移住者ではなく、組織ぐるみで何かをくろんでいるようで、村の中でも存在感を示すようになってきました。そんな折、娘の佳奈がリカルドと深い関係になっていることを知った昭夫は、単身彼らの下に乗り込んでいきますが、逆に自分の身を危うくしてしまいます。過疎の町、ひたひたと勢力を拡大する「隣人」たち、主人公の内に脈々と流れる先祖の血、それらが化学反応を起こしてゆく展開は読み応えがありました。長編小説としても成立する物語の大きさを感しました。

菊川香保里「どこにもない」(「バル」第9号)は不思議な作品です。冒頭、知らない街の図書館から、問い合わせの本が見つからなかったとの回答が届きます。しかし主人公には身に覚えがありません。この便りは何なのか、様々な臆測が頭をよぎり、やがて昔のピアノの先生の記憶なども蘇り、逸脱に次ぐ逸脱の果て、知らないどこかの街の、そして冒頭に登場していたかも知れない一冊の未知なる本の、最後のページの鳥の羽に、やがて、羽の微かな潮の香りへと物語は焦点化されてゆきます。様々なイメージがコラージュされたシニールな作品といえるかも知れませんが、いつの間にか読者を遙か彼方へと誘う手際の良さが際立っていました。

中野沙羅「鳥たちは遠くで騒ぐ」(「バル」第9号)は主

加藤有佳織

渡谷邦「ラストデーのようない日」(「あるかいど」第71号)のタナカは夫の暴力から逃れて引越し、廃車工場らしき風景の見えるアパートの居室で、夫と住んでいた家から金魚も持ってくるべきだと考え続けています。炎天のある日、決意して夫の留守中に金魚たちを運び出します。死んでいた一匹を埋めていると、白髪まじりの「女」が現れます。声をかけられたタナカは、金魚を持ち帰ってそのうち一匹はまだ生きていたのだと応じます。女は、「今日はラストデーだけれど」も「あなたは大丈夫かもしれない」と言い、自分も夫の暴力のため家を出たがアカミミガムを取りに行けずにいると告白します。そこでタナカは彼女をかつての家へ連れて行き、アカミミガムとワンピースを持ち帰ります。削ぎ落された文章に引力がありました。引越して以来積まれたままの段ボール、そこから取り出したスカート、頑ななしわ、枯れた植物に浴びせる水、熱を吸収するアスファルトの感触、女から渡されたワンピースの手ざわり。コントラストの強い写真のように、きつぱりとしているのにガランとした虚ろな質感のある忘れたい作品です。

木戸岳彦「隣人たちの道」(「季刊作家」第98号)が描く

のは、高齢化のすすむ加茂野と、この地でヘアサロンを営む三島昭夫です。水田の広がるむかしからの風景にも空き家や休業した工場が目立ち、地域の業務や行事に参加する者たちも数を減らしています。昭夫もまた豊層に近づき、廃業を考えています。疲れと諦めまじりに決めた期限の間際、見慣れない青年が散髪にやって来ます。ブラジルから来たこのリカルドは、伯父の経営する商社の日本支社で働きスパイスやハーブの輸入を手がけるとともに、加茂野のブラジル人たちと行政や地域住民との仲介者となっていました。昭夫は、彼の来店をきっかけに、加茂野で「隣人」と呼ばれながら地域業務の欠かせない担い手になっているブラジル人たちの存在を知り、散髪メニューを作ったり亀の生贄を提供したり、おそろおそろと関わります。コミュニティーと自身の老いを前に、矜持と卑屈さを抱え、あたらしく異質な存在に警戒しつつ様子をうかがう昭夫の意識を見事にこつてりと描き出していました。

家族やジェンダーをテーマに据えた同人雑誌「融」に熱気を感じました。その掲載作のひとつ、神楽坂いつみ「イレースと漂いつつ」(「融」Vol.2)では、語り手の御影はのかの通う高校で、校舎内に飾られているルノワールの「イレース」が日々移動し始めます。イレースに重なるのは、進路に戸惑うはのか自身です。大多数が四年制大学へ進学するなか、彼女は家庭の経済的事情により、推薦で専門学校へ進んで保育士になることを選びました。その選択を準

